

実践報告

表現ゼミによるオペレッタの実践報告－第二報－

A Report on the Operetta Practice by Seminar in Expression Arts - Second Report -

古木竜太	国際学院埼玉短期大学幼児保育学科
越智光輝	国際学院埼玉短期大学幼児保育学科
大野琴絵	国際学院埼玉短期大学教育研究所

令和7年度の表現ゼミは、音楽ゼミ・身体表現ゼミ・造形デザインゼミを合同したものに編成し、前年度の実践を踏まえ、さらなる改善と工夫を検討した。音楽表現チームは、各楽曲の演奏担当と楽器編成を学生主体で再検討した。また、新たに金管楽器を追加したため、音量バランスの調整が必要となり、シンセサイザーや音響設備を導入することで演奏全体の調和が図られ、演奏の質が向上した。身体表現チームは、出演する機会を多くし、学生による創作部分を増やしたことで、学生相互の関わりが深まり、振付や表現を主体的に工夫する学修態度が見られた。造形デザインチームは、参加型にするための演出方法に一部課題が残されたものの、舞台実践を通して保育者に求められる判断力や協働性、環境構成力などの資質・能力の育成に効果がみられた。

キーワード: 幼児教育、表現、オペレッタ、実践報告

1. はじめに

前回は、国際学院埼玉短期大学（以下、本学）における卒業研究の新たな試みとして、令和6年度、音楽表現ゼミ、身体表現ゼミ、造形デザインゼミの3ゼミが協働して取り組んだオペレッタ「不思議の国のアリス」の実践について報告した¹⁾。令和6年度のゼミ学生は、A保育園（2024年10月28日）、五峯祭（2024年11月10日）、卒業研究発表会（2025年2月17日）と3回の舞台上演を経験した。本番舞台を3回経験することで、それぞれの専門分野における表現技術を深めるとともに、音楽・造形・演技が一体となった総合的な表現を実践的に学ぶ機会を得た。令和7年度は、2年間のゼミ活動を通して、専門分野以外のより幅広い表現技術を学修できるよう、3ゼミを統合した。

本活動の2年目での有意義な学びとするため、表現ゼミ全体の活動内容と音楽表現、身体表現、造形デザインの各チームの取り組みについて報告する。なお、演目は令和6年度に引き続き、「不思議の国のアリス」²⁾を採用した。また、本論文に掲載した画像は、表現ゼミの学生に対して研究の主旨を説明し、掲載の許可を得ている。

2. 令和7年度表現ゼミの活動

令和7年度の表現ゼミの活動内容を表1-1・2に示す。令和6年度の活動での反省点を踏まえ、造形デザイン、身体表現チームの学生も歌唱を行うため、令和7年度は呼吸法および発声練習を

授業内容に新たに組み込むこととした。

第1回から第6回までの授業内容は2年生のみ全員で呼吸法、発声練習、歌唱練習を重点的に取り組んだ。第4回から第6回は、動作を伴う歌唱練習に切り替え、演技力の質向上を目指した。

表現ゼミを選択した1年生は、第7回から加わり、各チームに分かれて本格的な活動を開始した。各チームの構成は、音楽表現が1年生4名、2年生4名の計8名、造形デザインが1年生9名、2年生4名の計13名、身体表現が1年生5名、2年生4名に加え、音楽表現と身体表現を兼任する2年生1名であった。表現ゼミ全体では、1年生18名、2年生13名の計31名が舞台上演に向けて取り組んだ。

表 1-1. 表現ゼミの活動（前期）

回	日付	授業内容	使用教室
1	令和7年4月7日	昨年度の振り返りと今年度の目標設定	203教室
2	令和7年4月14日	発声練習と立位姿勢の訓練法（全体）	503教室
3	令和7年4月21日	課題曲の斉唱（全体）	503教室
4	令和7年4月28日	発声練習と動きを交えた歌唱練習（全体／前半）	001教室
5	令和7年5月12日	発声練習と動きを交えた歌唱練習（全体／後半／全体）	001教室
6	令和7年5月19日	発声・歌唱・演技・演奏練習、振付け練習（全体／全曲）	001教室
7	令和7年5月26日	発声・歌唱練習（部分）	001教室
8	令和7年6月2日	全体練習（発声、歌唱）、各チームごとの活動	001教室、004教室、音楽室
9	令和7年6月9日	発声練習（全体）、各チームごとの活動	001教室、004教室、音楽室
10	令和7年6月16日	発声練習（全体）、各チームごとの活動	001教室、004教室、音楽室
11	令和7年6月23日	発声練習（全体）、各チームごとの活動	001教室、004教室、音楽室
12	令和7年6月30日	発声練習（全体）、各チームごとの活動	001教室、004教室、音楽室
13	令和7年7月7日	発声練習（全体）、各チームごとの活動	001教室、004教室、音楽室、講堂
14	令和7年7月14日	発声練習（全体）、各チームごとの活動	001教室、004教室、音楽室
15	令和7年7月21日	発声練習（全体）、各チームごとの活動	001教室、004教室、音楽室

後期は、第5回、第7回、第8回目に本学の学院祭（以下、五峯祭）での上演に向けて合同リハーサルを実施した。五峯祭準備期間中に行った最終リハーサルは、学内の教職員および学生を観客として招待し、学生は本番さながらの緊張感をもってリハーサルに臨むことができた。

表 1-2. 表現ゼミの活動（後期）

回	日付	授業内容	使用教室
1	令和7年9月29日	発声練習（全体）、各チーム別の練習・製作	001教室、004教室、音楽室
2	令和7年10月6日	発声練習（全体）、各チーム別の練習・製作	001教室、004教室、音楽室
3	令和7年10月13日	発声練習、歌唱練習（全体）	001教室
4	令和7年10月20日	発声練習（全体）、各チーム別の練習・製作	講堂、001教室、004教室、音楽室
5	令和7年10月27日	合同リハーサル	講堂
6	令和7年11月3日	各分野別の練習・製作	講堂、004教室、音楽室
7	令和7年11月7日	会場装飾、合同リハーサル	講堂、001教室、004教室、音楽室
8	令和7年11月8日	最終リハーサル（ゲネプロ）	講堂、001教室、004教室、音楽室
9	令和7年11月9日	本番、会場復元	講堂、001教室、004教室、音楽室
10	令和7年12月1日	個人論文の執筆	音楽室、004教室、001教室
11	令和7年12月8日	個人論文の執筆	情報処理演習室など
12	令和7年12月15日	個人論文の執筆	情報処理演習室など
13	令和7年12月22日	卒業研究発表会に向けた練習	講堂、音楽室
14	令和8年1月19日	卒業研究発表会に向けたリハーサル	講堂
15	令和8年1月20日	卒業研究発表会での上演（本番）	講堂

3. 各チームの活動

3-1. 音楽表現チームの活動内容

(1) 演奏人数

令和7年度は表現ゼミを履修したゼミ生の名のうち、音楽表現チームとして2年生4名、1年生4名が指揮および楽器の演奏を担当した。

(2) 楽曲ごとの楽器編成

令和7年度のオペレッタの公演での楽曲ごとの楽器編成を表2に示す。楽器の記載順は「①木管楽器、②金管楽器、③打楽器、④その他、⑤弦楽器、それぞれのグループ内は高音から楽器から低音楽器」(andrewhugill.com2026、Bach To Basics Music 2026、Hansen Media 2026)に基づき、表2内の楽器の記載順とした。

表2. 楽曲ごとの楽器編成 (令和6年度・令和7年度)

場面	曲順	タイトル	令和6年度	令和7年度
オープニング	M1	ふしぎワンダーランド①	(管) Cl.・Tp. (打) Vib. (鍵) E.Pf.	(管) Fl.・Tp.・Tb.・Tub. (打) S.Cym. (鍵) Syn.
	M2	時計うさぎをおいかけてのうた	(管) Cl.・Tp. (打) Glo. (鍵) E.Pf.	(管) Fl.・Tp.・Tb.・Tub. (打) - (鍵) Syn.
第1幕	M3	ようこそふしぎの国へのうた①	(管) - (打) Glo. (鍵) E.Pf.	(管) Fl.・Tp.・Tb.・Tub. (打) - (鍵) Syn.
	M4	ようこそふしぎの国へのうた②	(管) - (打) Glo. (鍵) E.Pf.	(管) Tb. (打) - (鍵) Syn.
第2幕	M5	お茶会チャ・チャ・チャのうた	(管) - (打) Xyl.・Sl.Wh.・Slit Dr. (鍵) E.Pf.	(管) Fl.・Tp.・Tub. (打) Xyl. (鍵) Syn.
	M6	トランプの王国のうた	(管) Cl.・Tp. (打) - (鍵) E.Pf.	(管) Fl.・Tp.・Tb.・Tub. (打) - (鍵) Syn.
	M7	パイがない!のうた	(管) - (打) Glo.・Xyl. (鍵) E.Pf.	(管) Fl.・Tp.・Tb.・Tub. (打) - (鍵) Syn.
	M8	さいばんのうた①	(管) Tp. (打) - (鍵) E.Pf.	(管) Fl.・Tb.・Tub. (打) - (鍵) Syn.
	M9	さいばんのうた②	(管) Cl. (鍵) Cast. (鍵) E.Pf.	(管) Fl.・Cl.・Tp.・Tb.・Tub. (打) - (鍵) Syn.
フィナーレ	M10	ふしぎワンダーランド②	(管) Cl.・Tp. (鍵) Xyl.・Vib.・Tamb. (鍵) E.Pf.	(管) Fl.・Tp.・Tb.・Tub. (打) S.Cym. (鍵) Syn.

注 (管)：管楽器(木管および金管)、(打)：打楽器(鍵盤打楽器を含む)、(鍵)：鍵盤楽器の略

令和7年度は、フルート（以後 Fl.）、クラリネット（以後 Cl.）、トランペット（以後 Tp.）、トロンボーン（以後 Tb.）、チューバ（以後 Tub.）、シロフォン（以後 Xyl.）、サスペンデッド・シンバル（以後 S.Cym.）、シンセサイザー（以後 Syn.）、これら8種類の楽器から楽曲ごとの特性に応じて、音楽表現チームのゼミ生が主体となり楽器編成を決定した。指揮は音楽表現チームのゼミ生が担当し、コーラスについては造形表現チームのゼミ生が担当した。なお、M9でのみ使用されているCl.については、身体表現チームのゼミ生が女王役を演じながら演奏した。

（3）音響設備

音色や音量バランスの調整による演奏全体の質の向上を目的として、新たにシンセサイザー（YAMAHA : MODX6+）³⁾、ミキサー（YAMAHA : MG16X）⁴⁾、パワーアンプ（YAMAHA : PX3）⁵⁾、スピーカー（YAMAHA : BR12M）⁶⁾を導入した（図1）。



図1. 音響設備一覧

3-2. 身体表現チームの活動内容

令和6年度の五峯祭で上演したパフォーマンスを踏まえて、さらに子どもの興味を引き付ける作品にすることを目的として、各場面の演出を再検討した。令和7年度に変更した演出を楽曲ごとに報告する。

（1）オープニング「M1 ふしぎワンダーランド①」

令和6年度は「M1 ふしぎワンダーランド①」の曲が始まり、アリスが登場し、する。その後、時計うさぎなどが次々と登場する。登場人物を紹介する演出であった。それに対して、令和7年度は、「皆さん、こんにちは！私の名前はアリス！」とアリスが観客に話しかけ、本を読んでいこううちに眠りに誘われ眠る。次に、「M1 ふしぎワンダーランド①」の曲が始まり、アリス以外の演者が登場して踊る演出とした（図2）。



図 2. M1 オープニング「ふしぎワンダーランド①」の場面

(2) オープニング M2「時計うさぎをおいかけてのうた」

令和 6 年度は、指導教員が振付を考案した。第 2 番の歌詞部分で、時計うさぎが会場内を走り回り、アリスが追いかけるという演出とした。令和 7 年度は、学生自身が振付を考案し、時計うさぎ、アリスが踊る演出とした。さらに、第 1 番と第 2 番の間奏部分に時計うさぎとアリスの台詞を挿入し、時計うさぎが急いでいることがより強調される台本とした。

(3) 第 1 幕 M3「ようこそふしぎの国へのうた①」 M4「ようこそふしぎの国へのうた②」

令和 6 年度は、M3「ようこそふしぎの国へのうた①」で、スマイリーフラワーを演じる学生 2 名が振付を考案した。また、M4「ようこそふしぎの国へのうた②」では、チェシャ猫、いもむしを演じる学生は、指導教員の考案した振付で踊り、スマイリーフラワーを客席に座る子どもたちにプレゼントするという演出とした。

令和 7 年度は、M3 でスマイリーフラワーを演じる学生 1 名が振付を考案し、アリス、チェシャ猫、いもむしを同時に登場させた。M3 終了後にスマイリーフラワーの配布を行った後に M4 を踊る構成へと変更した (図 3)。



図 3. M3「ようこそふしぎの国へのうた①」の場面

(4) 第 2 幕 M5「お茶会チャ・チャ・チャのうた」

令和 6 年度は、ぼうしや、ねむりねずみ、3 月うさぎを演じる学生がそれぞれ振付を考案した。令和 7 年度は演者数が少なかったため、「ぼうしや」のみの出演とした。また、物語全体を通してスマイリーフラワー、チェシャ猫、イモムシの登場場面が少なかったことから、M5「お茶会チャ・

チャ・チャのうた」で、ぼうしやの後方で踊る演出とした。

さらに、M5 の歌詞に含まれる「なぜなぜ」を観客である子どもたちに問いかける場面を設けた。令和 6 年度は一般的な「なぜなぜ」を出題していたが、M5 の場面を担当する学生の提案により、令和 7 年度では、答えが「スマイリーフラワー」「チェシャ猫」「いもむし」となる内容に変更し、物語の登場人物を子どもたちに印象づける演出とした。(図 4)。



図 4. M5「お茶会チャ・チャ・チャのうた」の場面

(5) 第 2 幕 M6「トランプ王国のうた」

令和 6 年度、令和 7 年度のいずれにおいても、トランプ兵を演じる学生が振付を考案した。また、M6「トランプ王国のうた」を歌唱後、「白いバラ」を投影したデジタル背景をアニメーション効果で赤く塗り替える演出は、両年度で同様とした。(図 5)。

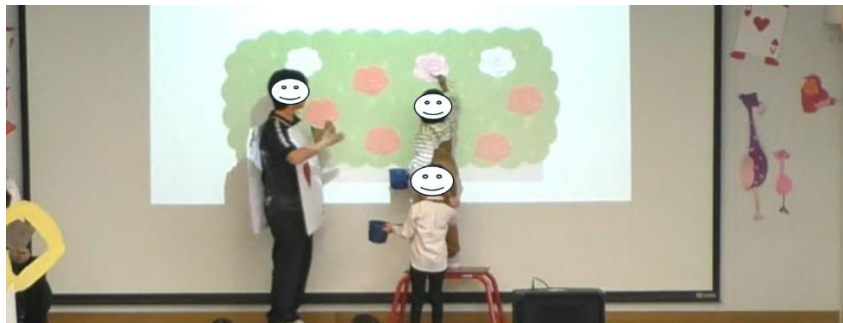


図 5. デジタル背景を塗り替える場面

(6) 第 2 幕 M7「パイがない! のうた」

令和 6 年度は、ハートの女王、王様、アリスが登場する場面とした。令和 7 年度は、登場場面が少ない役も出演し、舞台後方で踊る演出とした。追加した踊りの振付は、学生が分担して考案した。(図 6)。



図 6. M7「パイがない!のうた」の場面

(7) 第 2 幕 M8「さいばんのうた①」

令和 6 年度、令和 7 年度とも全演者が登場し、指導教員が考案した振付としたが、令和 7 年度は舞台をより広く使用できる配置であったため、移動を伴う振付へと変更した (図 7)。



図 7. M8「さいばんのうた①」の場面

(8) 第 2 幕 M9「さいばんのうた②」

曲の終盤においてトランプ兵がアリスを追いかける場面である。令和 6 年度は、アリスが会場内を走り回り、トランプ兵および全演者がそれを追う演出とした。その途中で、客席後方から大きな黒幕が出現し、子どもたちが座る栈敷席を覆う構成とし、その間にアリス以外の演者が退場する演出を行った。

これに対し、令和 7 年度は、トランプ兵のみがアリスを追いかけ、ハートの女王はクラリネットを演奏し、その他の演者は舞台後方で踊り、アリスを追いかけるトランプ兵がアリスを捕らえ損ねる演出とした (図 8)。



図 8. M9「さいばんのうた②」の場面

(9) フィナーレ M3「ようこそふしぎの国へのうた①」(追加場面)

令和6年度はM9「さいばんのうた②」の後、アリスが不思議の国の世界から戻り、M10 フィナーレ「ふしぎワンダーランド②」へと繋がる演出であった。これに対し、令和7年度は新しい場면을追加した。

トランプ兵から逃げ切ったアリスが再び登場し、ハートの女王に「女王さま、スマイリーフラワーって知っている？」と問いかける。そして、「スマイリーフラワーがあれば女王も笑顔になれるのになぁ」と観客の子どもたちに語りかける。子どもたちは、M3「ようこそふしぎの国へのうた①」の後に受け取ったスマイリーフラワーをアリスに渡す。アリスはそれを受け取り、M3「ようこそふしぎの国へのうた①」の旋律に乗せてハートの女王へ語りかけるように独唱する。その歌声に寄り添うように他の演者も加わり、最後は全員でM3「ようこそふしぎの国へのうた①」を合唱しながら退場する(図9)。

最後に、ナレーションを兼任する王様役の学生が「スマイリーフラワーのおかげでハートの女王が笑顔になったではないか！良かった、良かった！」と子どもたちに語りかける。王様が子どもたちの視線を引き付けている間に、アリスは物語冒頭の眠りについた場所へと移動する。



図 9. 追加場面 M3「ようこそふしぎの国へのうた①」

(10) フィナーレ M10「ふしぎワンダーランド②」

令和6年度は、各演者が舞台中央でポーズを決めるなど、カーテンコールとしての演出であった。これに対し、令和7年度は1番の歌詞部分において、学生と指導教員が協働で振付を創作した。振付の構成は、「演者同士の関わり」を重視し、一人では表現できない動きをテーマに据えていた(図10)。



図10. フィナーレ M10「ふしぎワンダーランド②」の場面

3-3. 造形デザインチームの活動内容

造形デザインチームでは、前年度に引き続き、衣装製作、小道具製作、壁面装飾、デジタル背景の制作を担った。令和6年度は本取り組みの初年度であり、教員・学生ともに手探りの中で制作および上演を進めていたが、令和7年度はその実践を踏まえた継続的な取り組みとして位置づけられる。特に、造形デザインチームの人数が増加したことにより、製作体制における役割分担や協働の在り方がより明確となり、造形表現の構想から実現に至る過程において質的な発展が見られた。前年度の演出を基盤としつつ、空間全体を俯瞰した構成が可能となり、結果として、よりスケール感のある壁面装飾へと展開することができた。

1年生は主に壁面装飾および小道具製作を、2年生はデジタル背景、衣装製作、小道具製作を中心に手掛けた。使用した材料は、フェルト、針金、段ボール、毛糸、両面テープ、ボンド、針と糸、花紙、ダンボール、絵具などであり、いずれも保育現場で日常的に扱われる身近な素材である。令和7年度五峯祭上演での、劇中に配布物(スマイリーフラワーの花)を用いた参加型演出では、数量の不足や色へのこだわり起因して、一部の子どもにおいて集中が途切れる場面が確認された。これらの状況から、配布物を用いた演出においては、製作する数量、渡し方、活動全体の流れとの関係性を含めて、より慎重かつ総合的に計画する必要があることを、担当教員として改めて認識するに至った。

4. まとめ

本項では、音楽表現・身体表現・造形デザインを指導した筆者らが、令和6年度との比較を通して令和7年度の活動について総括する。

4-1. 音楽表現チーム

令和6年度と令和7年度の楽器編成は同一ではなかった。そのため、それぞれの楽曲において楽器ごとの演奏担当箇所については、令和7年度に改めて検討することとなった。学生が主体となってこの検討に取り組んだことが、学生が自分の演奏担当箇所に責任をもって練習に取り組む

姿勢に表れていたと考えられる。

また、新しく楽器が加わり、さらにシンセサイザーや音響設備の機器を導入し、演奏全体のバランスを調整したことで、演奏の質を向上させることができた。今後も、楽器の編成に応じた最高の演奏実現に向け、最善を尽くしたい。

4-2. 身体表現チーム

令和6年度は本実践の初年度であったため、アリス以外の役の登場場面が少ないことが分かっていたが、具体的な改善策を考えることができず、台本の内容を忠実に演じることを目標にして取り組んだ。そこで、令和6年度の実践経験を踏まえ、令和7年度は登場場面が少ない役の出演を増やした。また、各場面の振付は令和6年度よりも学生が創作する機会を増やした。各場面における演者数を増やすことで練習過程では自ずと学生相互の関りがみられるようになり、学生自身が主体的に振付や台詞を工夫するようになった。これは指導を担当した教員が期待する学修態度であり、令和7年度のゼミ活動を通じて学生の成長を感じることができた。今後はさらに学生が主体的に活動するゼミを目指し、学生のパフォーマンスを最大限に発揮できるように支援したい。

4-3. 造形表現チーム

造形表現における学びの充実を図るため、活動内容および指導方法の見直しを行った。特に、不思議の国のアリスの世界観を大切にしながら、単なる場面の再現にとどまらず、物語に込められた意味や意図を表現に取り入れることを意識した授業展開とした。製作においては、学生が物語の背景や登場人物の特徴について考える機会を設け、それらをもとに表現方法を検討する過程を重視した。また、学生同士の関わりを取り入れながら活動を進めることで、多様な捉え方や発想に触れる場を構成した。今後は、物語理解と造形表現とを結びつけた学びをさらに発展させ、学生が表現の意図を意識しながら製作に取り組むことができるよう、授業の在り方を引き続き検討していきたい。

5. 考察

本研究は、保育者養成課程における表現系ゼミの実践を通して、学生が造形表現および舞台表現を媒介として、どのように学修成果を形成していくのかを明らかにすることを目的とした。特に、保育現場および学内行事という異なる状況での上演経験に着目し、現場条件の違いが学生の判断力、協働性、表現力の育成にどのような影響を与えたのかを検討する点に本研究の特色がある。実践においては、計画通りに進まない状況や予期せぬ事態が頻繁に生じる。本ゼミにおける舞台上演では、会場の広さ、来場者数、動線、安全面など、事前の想定と異なる条件に直面する場面が多く見られた。学生は、その都度状況を的確に把握し、臨機応変に対応を調整していた。こうした一連の経験は、保育者に求められる「状況に応じた柔軟な判断力」および「即時的な問題解決力」の形成に寄与していると考えられる。また、造形物や衣装、空間装飾の製作過程においては、素材の特性や安全性、演者の動きとの関係性を踏まえた工夫が求められた。これにより、学生は、造形表現を単なる製作活動としてではなく、子どもが安心して楽しめる環境を構成するための要素として捉える視点を持つ様子が見られた。このことから、造形活動を通して保育内容の理解や環境構成に関する視点に触れる学修機会となっていたと考えられる。さらに、複数の表

現系・複数学年による協働的な取り組みとして実施され、役割分担や意見調整を通して造形デザインチームの作品が完成された。学生は、他者の視点を取り入れながらより良い表現を模索する過程を経験し、保育現場において不可欠なチームワークやコミュニケーション能力を実践的に身につけていった。また、本ゼミでの舞台上演は、本学の保育者養成課程におけるディプロマ・ポリシーに掲げられている資質・能力を修得するために必要な機会であったと考えられる。また、専門的知識・技能の修得については、造形表現、舞台表現、衣装・装飾制作を通して、素材の特性理解や安全性への配慮、空間構成に関する基礎的な知識と技能を修得することができた。学生は、子どもの発達段階や興味関心を踏まえて表現方法を工夫し、保育内容への理解が定着した。思考力・判断力・問題解決力については、会場や来場者数の違いなどの条件に対し、臨機応変に演出や動線を変更し、上演を成立させる経験を重ねたことで、育成されたと考える。これらの経験は、保育現場において求められる柔軟な判断力や即応性の基盤形成につながっている。また、コミュニケーション力・協働性については、複数の表現、複数学年での制作・活動を通して、役割分担や意見共有、相互支援の重要性を体験的に学んだ点が挙げられる。

保育者としての態度・倫理観の形成においては、子どもが安全かつ安心して楽しめる環境づくりを第一に考え、演出や造形物を調整する姿勢が培われた。全員が活動に参加できるよう配慮する意識や、他者と協力しながら行事を運営する姿勢は、保育者としての基礎的態度の形成に寄与している。以上のように、本ゼミナールの実践は、ディプロマ・ポリシーに示される各項目を横断的に涵養する学修機会として位置づけられるものであり、保育者養成課程における教育実践の一事例として、その内容と教育的意義を整理したものである。

これらのことから、さらに本実践を通して、表現ゼミにおける舞台上演は、学生の技能的成長にとどまらず、保育者としての判断力・協働性・倫理観を統合的に育成する学修の場として機能していることが示唆された。同時に、担当教員として本実践を研究的視点から省察すると、学生の主体的な試行錯誤や即時的判断をいかに支援するかという点において、指導の介入水準や支援の在り方に関する迷いや検討の余地が常に伴っていたことも明らかとなった。舞台上演という不確実性を内包する実践は、あらかじめ定められた指導計画のみでは完結せず、状況に応じた支援の調整を通して学修が生成される過程そのものが教育的意義を有している。

今後は、本実践で得られた知見を授業設計に位置づけ直し、教員の省察と学生の学修成果との関係を継続的に検討することで、保育者養成課程における教育の質保証に資する実践研究として発展させていきたい。

著者の利益相反：開示すべき利益相反はない

引用文献

- 1) 古木竜太、越智光輝、大野琴絵：表現系ゼミの協働によるオペレッタの実践報告．国際学院埼玉短期大学研究紀要 2025；54：29-43.
- 2) 清野由紀子編集：はっぴょう会・劇あそび ふしぎの国のアリス／ガラスのくつ．株式会社ドレミ楽譜出版社．2022.

3) ヤマハ 「MODX+・シンセサイザー - 概要」

https://jp.yamaha.com/products/music_production/synthesizers/modxplus/index.html

(2026/01/26 参照)

4) ヤマハ 「MG Series - ミキサー - 概要」

https://jp.yamaha.com/products/proaudio/mixers/mg_series_xu_model/index.html

(2026/01/26 参照)

5) ヤマハ 「PX Series - パワーアンプ - 概要」

https://jp.yamaha.com/products/proaudio/power_amps/px_series/index.html (2026/01/26 参照)

6) ヤマハ 「BR Series - スピーカー - 概要」

https://jp.yamaha.com/products/proaudio/speakers/br_series/index.html (2026/01/26 参照)